ツムギの唄

wktk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ツムギの唄

【Ｎコード】
Ｎ７８８０Ｕ

【作者名】
ｗｋｔｋ

【あらすじ】
学校に向かう途中、バス停のそばにあった喫茶店のような建物の扉を開けると、そこは……異世界？　《ご都合主義でのんびりまったり。ドラゴンクエストモンスターズ２（イル・ルカ）の世界の話です。ゲーム設定とは異なる設定が存在するかもしれませんが、ご了承ください》

プロローグ（前書き）

ドラゴンクエストモンスターズを懐かしみながら書いていきます。

プロローグ

それは、中間テストを来週に控えた、どことなく薄暗い日のことだった。

「うわぁ……三次方程式って、こんな解き方あったんだ」

一人の少女が数学の参考書を片手に、バス停までの道のりを歩いていく。

彼女の名前は片桐紡宜（かたぎり つむぎ）。小さなリュックサックを背負い、学校規定の制服に身を包んだ彼女は、今まで知らなかった三次方程式の解法に感心と苦労を滲ませた息を漏らした。

受験シーズン真っ盛りにいる彼女にとって、受験前の中間試験などあって無いようなもの。最低限の点数さえ取れれば補習を受けずに済むし、何より受験に必要のない科目の勉強などやっている暇はない。

そんなやる必要性の全く感じられない勉強より受験で必ず必要になる数学の勉強をやっていた方が身のためだと、彼女は試験範囲外の受験勉強をしていた。

「今までの苦労はなんだってのよ、もう」

そんな不満に愚痴をこぼしつつ、参考書を読み進めながら転ぶことなく器用に歩き続ける。

バス停までは一本道で、しかも車の通りもほぼ無いと言って良いの

で、本を読みながら歩いていてもさほど危険はない。道なりはデコボコだが、こんなもの何年も歩いていれば身体が勝手に避けてくれる。もし仮に車が来たとしても、辺りが静かだから車のエンジン音は目立つのだった。

「２ｘ＋３ｙ＋ｚ＝０……っと、危ない」

道に転がっている石を危なげなく避け、再び教科書に没頭する。

彼女の家は学校から１５キロ離れたところにあった。１５キロと言えばちょっとしたマラソンに相当する距離。当然、女子高生の身にして毎日徒歩で登下校するのは無理がある。となると選択肢は自然に「自転車」か「バス」に定まるのだが、あいにくと生来の運動神経の悪さが祟って、紡宜は自転車に乗れなかった。

ではバスはどうなのかと言うと、家に一番近い停留所から2時間に一本出るかどうかというところ。しかも、バスに乗ったとして学校への直通ではないので、どちらにせよ大小は歩かねばならない。時間的にも少し都合が悪い。

そんなわけで、紡宜は普段、母親に自家用車で学校まで送ってもらっていた。しかし、今日は運悪く母親の体調が悪く、車を運転できる人がいないので、バスで登校することになっていたのだった。

「さーって、答えはー……っと？　あれ、もう着いた」

ふと何か視界に入るものを感じて、顔を上げる。それは、目的のバス停だった。

どうやら、参考書を読んでいるうちにかなり時間が経っていたらし

い。いったん参考書をカバンに戻し、バス停に掲示されている時刻表にて次の便の到着時刻を確認する。久々のバス登校なので、全く時刻表を覚えていなかった。

時刻表によると、次の便は7時２０分に来るそうだ。

「……まいったなぁ」

時刻表から目を離し、ケータイの時計を確認して、嘆息を一つ。

現在の時刻は午前6時。軽く1時間を超える待ち時間だ。乗り遅れたら遅刻確定だからと、時間に余裕を持ってかなり早めに家を出たのが裏目に出た。

教科書等は持っているのでテスト勉強の続きも出来ないことはないのだが、一つの区切りをつけた手前、どうにもやる気が起きない。

もう一つ嘆息。

「うーん、どうしようかなぁ」

何か暇をつぶせるものがあったかとカバンの中を探ってみるが、しかし1時間もの暇を潰せそうなモノは見当たらない。ケータイでも弄ろうかと考えたが、1時間も弄っていたら充電が無くなるのは目に見えている。

さあ困ったぞ。そう心で呟いて何気なく辺りを見回したとき、ふと不自然なものが目に入った。

「……あれ？　こんなところに喫茶店なんてあったっけ？」

バス停のそば、木を両脇に一軒ポツンと喫茶店らしい建物が建っていた。新しいのか古いのか、はたまたそういうデザインなのか、隠れ家的な地味で古ぼけた色合いの建物だ。

いつからココにあるんだろう。こんな何も無い田舎、建物一軒建ったらすぐ噂が広まるんだけどなぁ……と、不審に思いながら近づいてみる。どうやら中に人は居るようで、窓から明かりが漏れている。

しかし、ぐるりと一周見回した紡宜は、首をかしげた。店の名前を確認しようと看板を探したのだが、看板がどこにも無かったのだ。どこからどう見ても喫茶店にしか見えないのだが、お店の象徴とも言うべき看板が見当たらない。これも隠れ家的デザインの一つだろうか。

（このお店、看板無いんだ……。ああ、もしかして皆ここが喫茶店だって気づいてないのかな。だから噂になってないのかも）

少し強引な考えだが、他に理由も見当たらないのでそう納得する。どうせ時間もあることだし少し中を見ていこうかな、と思い立った紡宜は、取っ手に手を伸ばすと、そこにカギが刺さったままなのに気づいた。思わず、扉を開けようと伸ばした手が止まる。

「……えと、流石に不用心すぎじゃないかな……？」

悪いことをするわけでもないのに、思わずキョロキョロと周囲を見渡してしまう。そして誰も居ないことを確認してから、カギを抜いてみた。建物の古ぼけた雰囲気に似合わず、カギは綺麗な光沢を発している。やはりこの建物はあえて古そうに見せているんだろうか。

「……やっぱり、中の人に渡した方がいいよね？」

今度は恐る恐る、カギ穴に差し込んでみる。カチカチという金属が擦れ合う音を立て、カギは穴の中に飲み込まれた。カギを差し込むときの音は意外と大きなもので、神経質になっている耳には辺りに響き渡るほど大きな音に聞こえた。

奇妙な背徳感。さっきまで普通に入ろうとしていたのに、何故か今更になって無断で入ることが悪いことに思えてくる。実際あまり褒められたものではないのだが、そこは若者の特権というか、田舎ゆえの敷居の低さというか。

そのまま、うじうじと悩むこと数分間。どちらにしてもカギをこのまま放っては置けないんだからと、紡宜はついに入る決意をした。

（なんだったら、お店の人にカギを返してすぐ出ればいいんだし）

深呼吸で緊張に早まる鼓動を落ち着かせ、カギを捻る。微かな手応えと共に聞こえるガチャンという重々しい音が、扉の開錠を知らせた。

と、そのとき――

「え？」

扉が、勝手に開き始めた。

明らかに人為的なものではないその光景に、勢いよく扉から離れ、呆然とする紡宜。扉は独りでにゆっくりと開いていく。しかし、混乱する頭が事態を把握する前に、次なる異変が起こり始めた。

紡宜の視界が大きく歪んで、霞んでいく。開き始めた扉が、周囲の景色を渦のように飲み込み始めた。

「なに、これ……？」

意識が遠ざかっていくような気分に、手を伸ばして必死にもがく。伸ばした手が扉に触れそうになったとき、扉が完全に開き切った。

不意に訪れる、風に包まれて宙に浮いたような浮遊感。

「え……ちょっと……」

これは絶対、何かオカルト的なことに巻き込まれてる。そう紡宜が確信した次の瞬間、彼女の姿はその場所から消えて無くなっていた。

第1話　「異世界に渡る」

小さな鳥の声と、暖かな日差し。こんなに気持ちの良い睡眠は久しぶりだな、などと朦朧とした意識の中で考えながら、紡宜は寝返りを打った。

「んぅ……う？」

気持ち良さそうに眠っていた紡宜の眉根が寄る。初めはベッドか何かで寝ているつもりだったが、寝返りを打った時に頬にチクチクとした違和感を感じたのだ。ベッドにしてはトゲトゲしすぎているし、何故かひんやりと冷たい心地もする。

（これは……草の匂い？）

違和感の正体に気づいて、ようやく目を開ける。身体を起こし、座ったまま周囲を見渡すと、そこが見覚えのない森の中であることが分かった。空に昇っている太陽の位置を見るに、おそらく昼ごろだろう。

眠気を誘う柔らかな日差しの中で、紡宜は何故か芝の上で寝ていた。制服に視線を落とし、とりあえず着衣の乱れがないことを確認。傷や痛みなど他にも異常がないか確かめ、頭や肩についた草屑を払落してから思考回路を立ち上げた。

（なんでこんなところで寝てるんだろ……。制服だし、学校に行く途中だったと思うんだけど……）

ここに行きつくまでの経過が不明瞭なので、家を出てきたところから順を追って思い出していく。朝起きて、ご飯を食べて、教科書を読みながら学校に向かって、それから――

「あれ、喫茶店……？」

バス停に着いた後のことを思い出した紡宜は、ハッとなって再び周囲を見回した。

背の高い木に囲まれた芝生。暖かい陽気に包まれている心地の良い森だが、この際それはどうでもよい。あのバス停の周辺は森ではなく、田んぼだったはずである。少し木が並んで生えている程度で、紡宜の家の周辺にもこんなに木が生い茂っている場所はなかった。見覚えのない場所で寝ていたという不可解な状況に、紡宜の心に不安が溢れていく。

「確か、あの喫茶店の中に入っていった気がしたんだけど……」

思い返して、紡宜は思案する。カギを開け、視界が歪み始めたあの時、周りの風景全てが扉の中に吸い込まれていったような気がした。まるで渦潮に巻き込まれるように、自分の身体も吸い込まれてしまったような感覚。恐らくそれ巻き込まれてしまったことが原因で、自分はここにいる。

では、ここはあのドアの中なのか。喫茶店の中は実は森でした？

――いくら何でもそれはありえないだろうと自分でツッコみ、紡宜は一つ一つ可能性を確かめていく。

しかし結局、最終的に残った可能性は『オカルト現象』だった。要するに、何も判らなかったのだ。

「もう、ワケわかんないよー……」

あまりにも不可解すぎる出来事に、紡宜は理解しようとすることを一時止めた。考えても理解できそうにないことを考えていると頭が痛くなるだけだ。

身体を支えていた手を外し、足を放り投げるようにして仰向けに倒れこむ。芝の匂いと清々しい青空に目を細め、一つ大きなため息を吐いた。

（帰れるかどうかは判らないけど、とりあえず今日は学校を休むことになりそうだな……）

諦念と同時に、そんなどうでも良い気付きが浮かんだ。

心に恐怖と不安が渦巻く中で、紡宜はこの状況を遠くから眺めているような、どこか冷静な自分がいることを感じていた。事態が急すぎて思考が追い付いていけていないのかもしれない。

取り残された自分が、一歩退いた場所からこの場所を眺めている。だが、それが今は好転した。状況を冷静に判断できる心が少しでもあれば、恐怖は増大するが覚悟が決まる。

大きく息を吸って、もやもやとした気持ちをゆっくりと吐き出す。深呼吸を数回繰り返した紡宜は、膝に手をついて立ち上がり、ついでに固くなった身体をほぐすように一度屈伸をした。

「まずはここがどこなのか判らないと、どうしようもないし……」

とりあえず、ここから動こう。もしかしたら徒歩で帰れるかもしれないし、この場所を特定できるものを見つけよう。紡宜がそう決心して森の奥深くを見据えたときだった。

「っ！？」

ぬるりとした感触を足に感じ、生理的な嫌悪感に身体が竦み上がる。反射的に足を引こうとするが、その足は縛り付けられたように地面から離れない。

（なんでっ！？）

その原因を目で確かめようと振り返る。しかし、紡宜は自分の足首を掴んでいる“手”を目に収め、一気に顔を青くした。途端に足から力が抜け、尻餅をついてしまう。

紡宜の足首を掴んでいた“手”。その“手”はどろどろと溶けるように、掌だけで蠢いていた。

「き、きゃーーーっ！！！」

ほのぼのと平和な陽気に包まれた森の中、紡宜の絹を裂くような大絶叫が轟いた。

紡宜のいる森から少し離れた、とある建物の中。見る人が見れば価値の分かる品々に囲まれて、一人の男が机に向かって筆を走らせていた。その顔は真剣そのもので、筆を止めて時折何かを思案し、また筆を取る。

「ふむ……こんなものか」

しばらく続けて満足したのか、男は筆を置いた。紙には枝葉の広げた木や川の絵が描いてある。それはとても筆で描かれたとは思えないほど細かな線で描かれていたのだが、その絵の隣にはさらに細かな字で書かれた文章が載っていた。

その絵はどこかの場所を表したものであるらしい。風景画にしては絵が単調で記号的であり、更に情報が詰め込まれすぎているところを見るに、それはどうやら地図のようである。

男はその紙の端を持ち上げて間違いがないか一度確認をした後、紙を糸で括って宙に吊るした。部屋の中には、そんな地図がいくつもあった。

「ずいぶんと儂も旅をしたものだ……」

部屋に溢れる地図を眺め、男は感慨深げに眼を細めた。

ここにある地図は全て、男が旅をした場所を描いたものだった。一枚一枚に詰まっている思い出は、とても紙一枚には描き表わせないほど濃密なものだ。

今はもう旅を止めてしまっているが、ここに冒険に関する様々な記録を残すことで、次の世代に自分の経験を役立てることができる。

ここにある地図が新たなる旅人の手助けになることを思うと、男の瞳に熱い涙が浮かんできた。

「……やれやれ、さすがに歳か」

涙を手の甲で拭いながら、溜め込んだ熱い思いを息と共に吐き出す。今日はこの辺りにして息抜きに散歩でもしようかと席を立とうとしていたところに、部屋の扉を叩く音が聞こえた。

「誰だ」

「わたしですにゃ、王様」

女性的とも男性的とも取れない、丸みのある少し高めの声。扉の向こうから聞こえてきたのが自らの最も信頼する家臣の声だということに気づき、男は威圧的な雰囲気を引っ込めた。再び椅子に腰を落ち着け、声をかける。

「構わん、入れ」

「失礼しますにゃ」

男の許しを経て、扉が開く。そこに姿を見せたのは、紺色のローブに身を包んだ猫だった。しっかりと二歩足で立っており、背丈は男の膝のあたりほど。自分の背より少し高い杖を抱えて、猫は深々と敬礼をした。

「なんだ、何があったのだ」

挨拶もそこそこに、男は話を促した。目は好奇心に満ちており、先ほどまでの感傷に耽っている様子とは一変して、現役の頃を思い出すかのように生き生きとした笑みを浮かべていた。

この国一番の賢者という立場にあるこの猫は、魔物であるからして魔法が使える。特に占いを得意としており、詳細までは判らないものの、占いと言うよりは予言と言った方が良いほど、かなり精度の高い占いができた。

もし占いで何か出れば、真っ先に王に伝えることになっている。それらはこの国自体に影響を与えうる重大なものであり、そして王の好奇心を満たす娯楽でもあった。

「実はですにゃ、先ほど占いをしたところ、この世界に面白いニンゲンがやって来たことが分かったのですにゃ」

「面白い人間、とな？」

「はいですにゃ。占いによると、今朝方こちらに来たそうなのですにゃ」

訝しげに男に問われるが、猫は嬉しそうに答える。男は少し思案するそぶりを見せた。

猫の様子を見るに、今朝方この世界にやって来たという人間は、悪い者ではなさそうだ。災いをもたらすような人間であれば、猫ももう少し危機感を持った報告をするはずである。

面白い人間、という言い方が少し釈然としないが、確かめてみないことはない。もしかするとこの国に良い影響を与えてくれる人間であるかもしれない。

「その者はこの辺りに居るのであろうな？」

「はいですにゃ。詳しい位置はわかりませんが、恐らく森の中では

にゃいかと」
「森か……」
猫の話を聴き、建物の窓から外を眺める。猫の言う森とは、この国を周囲を取り囲むようにして存在する“世界樹の森”のことだ。その広大さからして、詳しい位置を特定するのは難しい。
遠く離れたところに見える木々を見つめ、男はあることに気づいた。
「待て、その者は戦えるのであろうな？」
それは、とても重要な問題だった。植物系と虫系、獣系が多く生息するこの世界樹の森は、この世界では割と平和な部類に入るフィールドとはいえ、モンスターがいる限り危険な部分も少なからずあるのだ。
もし戦えなければ、無事に森を抜けられるかどうかわからない。途中で気性の荒いモンスターに出会ってしまえば、そこでお終いなのだ。
猫もそれに気づいて、サっと顔色を変える。
「……そこまではにゃんとも。ですが、異世界を渡る旅人であれば、戦う術は持ち合わせているのではにゃいかと思いますが……」
「まあ、普通ならばな。しかし、お主が“面白いニンゲン”とまで言う者だ。普通であるはずがないであろう？」
「……」
核心を突かれ、猫は少し逡巡する。窓の外に見える森に目をやり、

いよいよ不安げな表情を見せ始めた。未だ会ってもいない人間のことを心配するとは、よほどその人間が気に入ったようだ。尚更に男の興味も湧いてくる。

（無事であればいいが……）

男はそんな猫の様子を見て、部屋の呼び鈴を鳴らした。チリンチリンと品の良い音を立て、部屋の中に響く。そのまましばらくすると、部屋の扉が叩かれた。

「失礼します、陛下。およびでしょうか？」

「うむ、兵を少し出してくれ。捜索隊を編成する。」

「捜索隊……ですか？」

現れた兵士に向かって、男は手早く命令を告げる。しかし兵士はいきなりのことに、戸惑いの表情を見せた。何の前触れもなく兵を出すと言われたのだから、当然と言えば当然のことだが。

「捜索対象は異世界の旅人一人。男か女かは判らぬが、外の森に降り立ったようだ。戦闘技能を有していない可能性がある。凶暴なモンスターに出会う前に保護しろ、いいな？」

「は、はッ！　直ちに！」

男が命令の詳細を伝えると、兵は命令の内容を理解してすぐさま部屋を出て行った。急いで走り去ったその背中が視界から消えると、男も部屋を出る準備を始める。

「王様、どこへ行くのにゃ？」

「色々と準備をすることがあろう。旅人を迎えるのに何の用意も無しとは国の恥だ。」

装いの上からマントを羽織る。再び呼び鈴を鳴らした男は、現れた侍女に歓迎の準備を始めるよう言い渡した。侍女はどこか楽しそうな主人の様子に首を捻ったが、命令を聞くとすぐに行ってしまった。

「我らも行くぞ。ついて参れ」
「はいですにゃ」

（さて、どんな人間がやってくることやら……）

颯爽とマントを翻す男に、猫は小走りでついて行く。

久しぶりの来客に、知らず知らず男の顔に笑みが浮かぶ。何か面白いことなりそうな予感に胸を弾ませながら、男は部屋を後にした。

第2話　「初めての初めまして」

紡宜の目の前には、どろどろと流動しながら動く“手”があった。突然足首を握られた恐怖によりパニックに陥っていた紡宜が後ずさると、“手”はゆっくりと彼女から離れていった。

「えっと……」

紡宜は困惑の眼差しで目の前の“手”を見た。しかし、目の前の“手”はどろどろと流動しているだけで、全く近づいてくる気配がない。

とりあえず足首を離してくれたことに対する安堵とぬるぬるとした感触が無くなったことに対する解放感に、紡宜はそっと胸を撫で下ろした。

（別にわたしを攻撃しようとしたわけじゃないみたいね……）

少し離れた場所で静かに佇む“手”を見て、紡宜はそう感じた。まるで彫刻のように動かぬその“手”が、自分は敵でないことを知らせようとしているように見えたのだ。

戸惑いながらも、少しずつ落ち着きを取り戻していく。こちらに害が無いと判れば幾分気が楽になる。紡宜は仰け反っていた身体を起こし、真正面から“手”に向き合った。

（それにしても、これは一体何なのかしら……？）

“手”が動かないことを良いことに、紡宜はじっと観察し始めた。

目の前の“手”は人間の手を模っていて、まるで本物の手のように動いている。表面に流れている流動体は、どうやら泥であるらしかった。

しかし、手首と地面との境界線が見えないので、これが一体どういう仕掛けで動いているのか、いまいちよく分からない。地面から直接手が生えているように見えるのは気のせいだろうが、如何せん表面を覆っている泥が邪魔で本体がよく見えない。

「……んー……？」

ふと、紡宜はこの“手”をどこかで見たことがあるような気がしてきた。見慣れているわけではないが、確かにどこかで見たことがあるような。

見知ったものであれば、それほどまで恐怖心は湧いてこない。気味は悪いが、何故かあまり怖い感じがしないのはその為かと紡宜は納得した。

相変わらずピクリとも動かない“手”に、紡宜は一度近づいてみる。手を伸ばせば握手ができるほどまで近づいて、紡宜はやっとその答えに行きついた。

「え……もしかして……マド……ハンド……？」

紡宜は、恐る恐る尋ねるように呟いた。それはほとんど独り言のようなものだったのだが、彫刻と化していたマドハンドは確かに反応を示した。

グーパーグーパーと、手を結んだり開いたりを繰り返す。もしかすると、『肯定』の意思を表そうとしているのかもしれない。それを見て、紡宜の表情は驚きに固まった。

「ウソ……なんでこんなところに……？」

呆然とした紡宜の疑問が口からこぼれる。まさかという思いで口にした答えが当たってしまうと、逆に戸惑ってしまうものだ。紡宜はグルグルと困惑する頭に、一瞬眩暈を覚えた。

ドラゴンクエストというゲームに登場するキャラクター、マドハンド。

泥の肉体を持ち、“手”だけで行動する、魔物（モンスター）の一種。

紡宜の目の前にいるものは、紛うこと無きファンタジーの世界の住人だった。

グーパーを繰り返す『肯定』の合図を止めたマドハンドは、また彫刻に戻ってしまった。

もしかすると、紡宜の呆然とした顔を、恐怖していると捉えたのかもしれない。決して近づいて来ようとはせず、紡宜の反応を待っているように見える。

「夢じゃない……よね」

紡宜は一度、頬を強く引っ張ってみた。思ったよりもよく伸びたが、しかし痛くない。それは彼女のもち肌ゆえだったのだが、脂肪が付

いてるのかな、と紡宜は軽く落ち込んだ。

アホみたいなことをしているとは自覚しているが、本当は紡宜にもこれが夢ではないことぐらい判っていた。もしこれが夢であれば、草のチクチクとしたリアルな感触がある時点でおかしいしいのだ。紡宜は一度現状をを忘れることで、気持ちをリセットしようとしたのだった。

確かに、オカルト現象に巻き込まれたとは自覚していた。ここが見知らぬ場所であり、以前いた場所とは明らかに空気が違うということも感じていた。神隠しなんじゃないかとも考えた。しかし、これがもし本当にマドハンドなのであれば、つまり、ここは――

「……ふぅ」

目を瞑り、わざと声が出るように一度大きく深呼吸して、雑念を断ち切るように頭を振る。色々と考えなければならないことはあるけれど、とにかく、まず第一に確認しなければならないことがあるのではないか。

再びマドハンドを見据えたとき、紡宜の瞳には恐怖や不安の色はなかった。そこにあるのは、強い覚悟の光。様々な思いを込め、紡宜はマドハンドに問いかけた。

「キミは、わたしを襲おうとしてるわけじゃないんだよね？」

マドハンドは動かない。不安を押し殺して待つ紡宜は、掌にかいた汗を握りこんだ。もしかしたら、言葉の意味が伝わっていないのかもしれない。そう思い、紡宜は重ねて問いかけた。

「キミは、わたしの敵じゃないんだよね？」

ぴくり。紡宜の言葉を今度こそ理解したのか、マドハンドは反応を示した。紡宜がじっと見つめる中、ゆっくりとその手を結んでいく。そして、再び開くと、離れていた距離を少しだけ縮めた。

『敵じゃないよ』

そんな言葉が聞こえたような気がして、紡宜は柔らかにほほ笑んだ。一歩分開いていた距離を自分から詰め、じっと待つマドハンドの前にしゃがみ込む。

紡宜が手を出すと、マドハンドはすり寄るように近づき、そしてそっと握り返した。

「わたしの名前は片桐紡宜。よろしくね」

これが紡宜の、この世界の魔物に対する初めての『初めまして』だった。

ここに魔物がいるということは、自分は異世界に来てしまったのか。それとも、ここは元の世界のままで、異世界の魔物がこちらに来たのか。

マドハンドとの邂逅を経て、紡宜の頭にはその二つの可能性が浮かんだ。

元の世界に魔物が現れたのだとすれば、これは世界的な一大事だ。他にも魔物が居るかもしれないと判れば、迅速に対処しなくてはならない。凶暴な魔物が一匹いるだけで、とんでもない被害が出ることは自明のことだ。

勿論、こんなところでノンビリしている暇などない。紡宜がこの原因を作ったかもしれないのであれば、少しでも早くこのことを誰かに知らせなければならない。

しかし、紡宜は可能性として自分が異世界に来てしまったのだろうと半ば確信していた。

証拠はない。ただ、周囲に生える木や森全体の雰囲気、空気の感じを見て、ここは自分の元居た世界ではないのではないかと薄々気づき始めたのだ。

魔物が元の世界に現れたのだとすれば、紡宜が見知らぬ場所に転移していたことの説明がつかないが、紡宜が異世界に来てしまったのだとすれば、それで全ての説明がつく。要するに、その方が自然な流れなのだ。

しかし、いくら悩んでも確たる証拠がない限り答えは出ない。そこで紡宜は大きな問題を置いといて、今直面している問題を一先ず片づけることにした。

「ね、キミのこと何て呼んだら良いかな？」

ふいに尋ねられたマドハンドは、掌をこちらに向けて振り返った。マドハンドに自分の名を名乗った紡宜は、しかし相手の名前を聞いていないので呼び名を考えていたのだ。

「キミ、じゃ余りにも他人行儀だもんね。かと言って直接名前を訊けないし……」

考えてみるとなかなかに難儀な問題に、紡宜は再び頭を悩ませる。名前を訊こうにも、声が聞けないので無理がある。そもそもちゃんとした名前があるのかどうかすら謎だ。

先ほどまでと違い、幾分打ち解けた様子で佇むマドハンド。といっても相変わらずじっと動かないままなので、雰囲気から察するしかない。

紡宜との物理的距離が縮まったところを見るに、マドハンドからしても紡宜を気の許せる相手だと認めているようではある。

「ね、名前はある？　誰かに付けて貰った、キミの名前」

マドハンドはしばし固まった後、手を結んで手首を折って見せた。見様によっては、がっくりと頭を下げているように見える。これは『否定』の合図かな、と紡宜はマドハンドとのコミュニケーション手段を確立させていく。

それはともかく、名前が無いのであれば、こちらで勝手に呼ぶしかない。そうすると必然的に、それが本当の名前になってしまうだろう。ゲームであれば仲間になった魔物にはその場で名前を決めるモノなのだが、この場合ただ出会っただけなので、仲間になったのだと決めつけてしまうことが出来ない。

名前を勝手につけて良いものかどうか悩んだ紡宜は、マドハンド自身に訊いてみた。

「名前……私が付けても良い？」

紡宜の問いに、マドハンドは握っていた手を開いて、また閉じて、『肯定』の意思を示した。しかも、今回は少しテンポが速い。どうやら喜んでいるのか、興奮しているようだ。

そんなマドハンドの様子が微笑ましくて、紡宜はマドハンドの指を撫でた。握手をしたときから既に手に泥がついてしまっているのだが、彼女はもはや気にした様子もなく名前を考え始めていた。

「えっと……ドロドロしてるし……体が泥で出来てるんだから、ドロちゃんはどう？」

考えた割に、ものすごく単純な名前だった。

どう？と小首を傾げて尋ねる紡宜に、マドハンドは軽く指を折り曲げた状態で静止する。どこか悩んでいるような、吟味しているような雰囲気を感じ取って、紡宜はじっと待った。

やがて指を伸ばしたマドハンドは、親指だけを立て、サムズアップの形をとった。どうやら、これは普通の『肯定』とは違う、特別な意味の『肯定』であるらしい。「オッケー！」という声が聞こえてきそうな生き生きとしたマドハンドの様子に、紡宜は笑みをこぼした。

「ふふっ、じゃあ今からキミは、マドハンドのドロちゃんだ。」

“ドロ”と名の付いたマドハンドは、嬉しそうに手を振った。

呼び名も決まったところで、紡宜はここから離れる為に再び立ち上がった。

元々、この場所から離れようとしていたところを、ドロに足を引っ張られ、強引に止められたのだ。ここがどこだか把握するために、場所を特定できるものを探さなくてはならない。

出来れば人に会って話を聴けたら良いんだけど、と紡宜が考えていると、ドロが紡宜の足をチョンチョンと突いた。

「ん、なーに？　ドロちゃん」

ドロは紡宜の注意を引くと、指を差してある方向を示した。疑問に思って指し示された方を眺めていると、ドロはその方向に向かって進み始めた。少し進んで、またこちらに振り返る。

「ついて来いって言いたいのかな？」

そのような雰囲気を感じて、紡宜は指し示された方を注意深く窺ってみる。囲まれた木々に視界を妨げられてよく分からないが、その方向は先ほど紡宜が分け入ろうとしていた方向とは真逆の方だ。

そこでふと、紡宜はドロに足首を掴まれたことを思い出した。あの時はビックリしてしまっただけだったが、ドロに害意が無いとすれば、足首を掴んでまで紡宜の行動を阻害する理由がちゃんとあるはずなのだ。

自分の存在を知らせるためだけに足首を掴んだとは思えない。だと

すれば、ただ単純にその方向へ行くのを阻害したかったのではないかと紡宜は推測する。

「もしかして、こっちに行っちゃダメなの？」

ドロが進もうとしている方向の反対、先ほど自分の進もうとしていた方向を指して、紡宜は尋ねた。ドロは少し固まって考えるような素振りを見せると、ぎこちなく『肯定』の意を示した。

紡宜はそんなドロの様子を見て確信すると、笑って答えた。

「分かった、じゃあそっちに行こうか」

紡宜には、ドロがどこか遠慮しているように見えた。「そっちに行ってはいけない」ではなく、「そっちには行かないで欲しい」といったような、複雑な気持ちを感じたのだ。

それはまるで、力の強い者に対する畏怖のような態度。もしかするとこっちには、この森のボスがいるのかもしれない。紡宜を会わせたくはないけど、この森に住む魔物の一体として、あからさまにボスを拒絶する態度はとれない。そんな感じに思えたのだ。

どうせ地理も分からなければ方角すら判らないのだから、ドロを頼ってみよう。紡宜が指し示された方へ歩き始めると、ドロは嬉しそうに先陣を切って進み始めた。

「他にもドロちゃんみたいな良い子がいるといいなぁ」

森の中へと分け入って行く紡宜。枝葉に遮られて薄暗い森は、沈もうとする夕日に照らされ、静かに夕闇を迎えようとしていた。

第3話　「魔物の住む森」

ドロを先導に歩き始めて数十分が経った。辺りは暗くなりかけており、夜が近いことが分かる。

もうそろそろどこか留まれる場所を探さなければ、今夜は木々に囲まれた森のど真ん中で過ごすことになってしまう。キャンプをするつもりでこの森に居るならまだしも、制服に通学カバンという装いの紡宜は、安全な場所を確保できなければ寝ることすら出来ないかもしれない。

その上食べる物が一切無いというこの最悪の状況。この森で食べられるものがあるのか、そろそろ空腹が気になりだした紡宜は不安になり始めた。

（ゲームだったら、アイテムがフィールドに落ちてるんだけどなぁ……）

先ほどから地面を眺めて歩いている紡宜は、役に立ちそうなものが一切落ちていないことに落胆した。ゲームであれば、歩いていれば数分に一回くらいは必ずアイテムを拾えるのだが、今は数十分歩いていても何の収穫も得られていない。

考えてみれば、地面に『ルーラの杖』や『キメラの翼』、ましてや『骨付き肉』や『しもふり肉』などがそうそう落ちているワケがないのだ。

良くてせいぜい『腐った肉』が落ちているくらいのものだろう。近くに町が無く、『毒消し草』も持っていないこんな状況で食べるな

ど自殺行為に等しいので、もちろん食べるつもりは全く無いが。

そもそも、ゲームの中のキャラクターは空腹など訴えないのだ。この森にやってきて数時間、紡宜は「ゲームの世界に居るが、ゲームではない」という現実をようやく身に染みて実感してきた。

「ねぇ、ドロちゃん」

紡宜はドロに呼びかけて歩みを止めさせた。ドロは先ほどから先導に従事しており、時折紡宜が木の根に躓きそうになると歩みを止め、気遣わしげに寄って来る。

しかし、如何に言っても“手”が体の全てというモンスターなので、手助け出来ることなどほとんど無く、ただ心配そうにじっと紡宜の傍にいるだけ。体勢を立て直した紡宜が「もう大丈夫」と笑いかけると再び歩き始めるということを繰り返していた。

紡宜に呼び止められたドロは素早く反応し、歩みを止めると「なに？」とばかりに振り返った。

「この先に食べ物はある？」

ドロがどこに向かっているのか判らない紡宜は、とりあえずそこに何があるのかを尋ねてみた。ドロと言葉が交わせない以上、自分から必要なものを手に入れられる場所を訊くしかない。

もし今目指している場所に食料が無いならば、今日は食料を諦め、改めて明日探して回る必要がある。そう考えていた紡宜に、ドロは手をグーパーして『肯定』の意思を示した。

「良かった……」

どうやら、最悪の状況は免れたらしい。一安心した紡宜は更に近くに水場はあるか尋ねてみた。典型的な現代人の自分に生水が飲めるとは思わないが、それでも水が近くにあるのと無いのとではかなり勝手が違う。

期待を込めた紡宜の質問に、ドロは少し悩んでからゆっくり『肯定』を示した。悩んだ時間と控え目な肯定が気になるが、一応水場もあることにはあるらしい。

「そっか、じゃあそこに行こう！」

思っていたよりも悪くない状況に嬉しそうな笑顔を向ける紡宜を見て、ドロは再び先導を開始した。

それから数分ほど後のこと。先導のドロが停止したのを見て、紡宜は暗い足元に注意を払いながらドロの隣に並んだ。どうしたんだろうと訝しみながら顔を上げると、そこにある光景を目にして、紡宜は唖然とした。

「うそ……すごい……」

紡宜は自分の目が信じられなかった。胸が大きく高鳴り、呼吸をすることも忘れるほどその光景に心を奪われていた。ゲームではこんな光景、見たことがない。見れるはずもなかった。

そこにあったのは、見上げるほどの大樹だった。幹は抱え込むには

大人が数百人も必要になるほど太く、表面は命の躍動を感じさせるようにごつごつと波打っている。

生命力にあふれるその大樹は、まるで傘のように四方へと枝葉を伸ばしており、その全容は近くにいる紡宜の視界に収まらないほど大きい。しかし相当な年月を生きてきたであろうことに反して、その木はとても青々としていた。

あまりの迫力に言葉を失う紡宜。しかし、感動する紡宜が見つめる先にあったのは、大樹そのものではない。そこを根城として暮らす魔物たちだった。

ぷよぷよと樹の周りを飛び跳ねているスライム。樹の天辺の方で宙吊りになっているドラキー。自慢の角をせっせと磨いているアルミラージ。

泣いているおおきづちが居れば、そばに居るスライムツリーが自身の葉を擦り付けて慰めている。そこへホイミスライムが寄ってくると、ふわりと優しい光に包まれたおおきづちは立ち所に泣き止んでしまった。嬉しそうにはしゃぐおおきづちにつられ、スライムツリーが葉を揺らして踊りだせば、通りかかったももんじゃも一緒に踊り始めた。

種族ごとに固まって生きているのではなく、いろんな種族の魔物たちが争いあうこと無くそこで仲良く共存していた。

「スゴイ……楽しそう……」

目の前の幻想的な光景にしばらく呆然と立ち尽くしていた紡宜は、ふとこちらを見つめているスライムに気付いた。遠くの方からビッ

クリしたように固まっている。

「や、やっほー」

なんだか怖がられているような気がしたので、紡宜は笑顔を心がけながら、遠慮がちな挨拶をして手を振った。すると、遠くに見えるスライムは「ピッ」と鳴き声を上げて物陰に隠れてしまった。

それもそのはず。魔物としてはかなり弱い部類に入る彼らは、人間というと恐ろしく強い、踏みつぶされれば一溜りもないというイメージしかないのだ。こんな森深くに入ってくる人間といえば、魔物に慣れた旅人か、屈強な戦士くらいしか居ない。彼らは今まで強い人間しか見たことがなかったのだった。

「……」

「……」

予想はしていたが、なんだか悲しい。紡宜は上げた手をそのまま静かに下して、隣にいるドロに振り返った。ドロは相変わらずそこに佇んでいるだけだが、どこか気まずそうな雰囲気を感じる。あえて無反応を貫いているようにも見えた。紡宜はそんなマドハンドに、八つ当たり気味にちょっと恨めしそうな視線を送った。

魔物たちの根城となっている大樹は、窪みを利用して、また、洞穴のように大樹を掘って、一種のマンションのようになっていた。そこには今見えている魔物たちよりも更に多くの魔物が住んでいたようで、逃げて隠れたスライムに気付き、あちこちから魔物たちが顔を出し始めた。

「……こんにちわー……」

紡宜はめげずに、もう一度控え目な挨拶をしてみた。すると、今度は逃げない魔物も多く、決して近づいてこようとはしないが、明らかに興味を持ってこちらの様子を伺っているものがいた。

『これはいけるかな？』とそろそろと木々の暗がりから出た紡宜は、少しずつ近づいて接触を図ってみた。

大樹の周りで遊んでいた魔物たちはすでに、一カ所に固まるか巣の中に逃げ込むかしている。今外に残っているのは、好奇心が強い魔物たちだけだ。ドロは後を付いて来るかと思いきや、その場に留まって様子を見守る姿勢を取っている。

ゆっくり、ゆっくりと警戒心を煽らないように近づいていく。すると、大樹との半分くらいまで近寄ったとき、一匹のアルミラージが他の魔物よりも一歩前に出た。

「……」

アルミラージは、観察するように紡宜をじっと見つめ始めた。人間ではあるが攻撃はしてこない、まるで敵意を見せない、そのくせ少しずつ近づいてくるというよく分からない行動を前にして、紡宜が何者であるのかを見定めようとしているのだ。

クリクリとした大きな眼を瞬かせて耳をぴくぴく動かす様は、ウサギによく似ている。紡宜はその可愛らしさに身悶えながら、決して大きな身振りをすることのないように気を配った。

「ほら、ダイジョーブ。怖くないよー？」

紡宜は歩みを止めた。歩みを止め、静かにしゃがんでアルミラージを待った。紡宜は小さい頃から動物好かれる性質にあったが、怯えている子犬などには決して近づかないようにしていた。決して相手を怖がらせるようなことはせず、向こうから歩み寄ってくれるまで待つのだ。

「ぴー……」

「きー……」

どちらも動かない状況が続き、大樹からは様子をうかがう魔物の顔が増えてきた。

紡宜はアルミラージを眺めて、『あぁ、可愛いなぁ……だっこしたら気持ち良さそうだなぁ……』などと妄想を膨らませていた。アルミラージは時折角を振りかざして威嚇をしていたのだが、紡宜は意に介していないどころか、ほとんど気付いてもいなかった。

そのまま三分ほどが経過したとき、アルミラージが動きを見せた。ピョン、と一歩前に踏み出したかと思うと、その一歩がきっかけになったかのように、躊躇無く紡宜に近づいてきた。散々威嚇を繰り返したが何の反応も見せない紡宜に、敵意はないと判断したのかもしれない。

「……きゅう？」

あともう三歩ほど。紡宜が一歩踏み出して手を伸ばせば抱っこできるというところまで近づいて、アルミラージはふいに小首を傾げだした。どうしたんだろうと紡宜が疑問に思うや否や、そのまま一気に紡宜の元まで駆け寄り、何かを探るようにクンクンと紡宜の匂いをかいでくる。

紡宜に鼻をくっ付けて直接匂いをかいだアルミラージは、ピクンとビックリしたような反応を見せた。パッと紡宜の顔を仰ぎ見ると、しげしげと観察するように覗き込む。

（……何か匂いが出るようなもの持ってたっけ？）

紡宜はアルミラージの行動から、何か自分が発する匂いにつられたようだと気づき、ポケットやカバンの中に入っているものを思い浮かべる。お菓子や食べ物類は入っていないはずだが、一体何が引っ掛かったのだろうか。

「きゅう！」

何かあったかとカバンを覗いてみた紡宜にアルミラージは近づくと、角を紡宜にぶつけないようにして顔をこすり付け始めた。

これは明らかな親愛の証。どうやら、やっと敵ではないと認められたようである。紡宜はその長かった戦いに心中でガッツポーズを取りつつ、顔は目の前で愛嬌を振りまいているアルミラージの可愛さに頬を緩ませた。

「ふふっ　かーわいー！」

そのあまりの可愛さに我慢が出来なくなった紡宜は、アルミラージの鋭くとがった角に気を付けながら、そっと頭をなでた。

何しろ、アルミラージなど二次元でしか見たことがなく、その絵ですら少々攻撃的に描かれていたのだ。こんなにも人懐っこく、可愛らしい魔物だとは思わなかった。紡宜はキャラクターデザインの重

要性をしみじみと考え、次にゲームをすることがあれば絶対アルミラージをパーティーに加えることを心に決めた。

頭をなでられて気持ち良さそうにしているアルミラージを見て、紡宜が敵ではないということが判ったのか。その他の固まりになっている魔物たちも恐々しながら、そろそろと近づいてきた。

「……ぴき？」

「……もじゃ？」

そして、他の魔物も皆アルミラージと同様に、紡宜にある程度近寄ると首をかしげ始める。クンクンと鼻を鳴らし、皆やはり驚いたような反応をした後で、紡宜にじゃれてくるのだ。

（うーん、何か魔物が興奮するような匂いってあるのかしら？）

紡宜はその一連の行動を疑問に思ったが、あまりにも人懐っこく可愛い魔物たちに囲まれると、邪魔な思考など立ち所に吹き飛んでしまう。

結局紡宜は魔物の大群に埋もれてしまい、見かねたドロが救出するまで、思う存分魔物たちの感触を楽しんでいたのだった。

第４話　「現状把握のてがかり」

大樹の足元でご挨拶を交わした紡宜は、大勢の魔物たちに導かれてその住処へと足を踏み入れた。

「ふぇー……おっきー……」

大樹の根元からその樹頭を見上げ、改めてその途方もない巨大さに圧倒される紡宜。樹の幹に触れられるほど近寄ってしまうと、もはや全貌を目に収めることが出来ない。

見上げているために口がだらしなく開かれ、唖然としたまま固まってしまっているのだが、生憎ここにはそれを注意できる人間が居なかった。魔物たちは立ち止まったまま動かない紡宜を急かすような素振りを見せたが、しかし自分たちの誇る根城に驚きと感動を向ける紡宜に対して無理を強いて動かすことはできないようだ。

しばらくして首の痛みが無視できなくなってきた紡宜は首をグルグルと回して準備体操を始めると、子供のように「出来るだけ高い階層に行く！」と張り切って大樹を登り始めた。

「それにしても、このスロープすごいなぁ……。宙に浮いてるみたい」

大樹は本来地中に巣を作るキラースコップたちの手によって芸術的なまでに彫りこまれており、その幹をグルグルと周回する螺旋階段のような足場が形成されている。もちろん大樹に開く無数の洞穴も全て彼らの手によって掘られており、この大樹の中でキラースコップたちは一種の大工のような役割を担っている。

そんなキラースコップたちの天才的な感性によって奇跡的なバランスを保っている大樹は、もはや樹というよりもむしろ巨大建造物のようであり、その部屋を一つ一つ覗いていくうちに紡宜の中からは“樹を登っている”という自覚が失われていった。

そのまま、大樹に巻きつく螺旋階段をひたすら登っていた紡宜だったが、しかしエレベーターが存在しない超高層マンションのような大樹を一息に登れるはずはなく、ようやくここにきて下りるときの不便に気付いた。

確かに高みからの景色を見てみたい好奇心はあるけれども、それを実行した後の始末を考えると空恐ろしいものがある。噂によると登るよりも下る運動の方が身体にとって負担になるらしい。今日の体力では絶対に無理だ。肩でぜいぜいと息をし始めて諦めを悟った紡宜は、大人しく低層階にある部屋を借りることにした。

「すみませーん、ごめんくださーい！」

幸い、スライムのように樹を登りづらい種族の巣も多数存在するため、低層階には多くの部屋がある。それらの部屋の中の一つを借りようと近くにあった穴を覗きこんでみると、そこはキラースコップたちの部屋だったようで、何かの作業中だったらしいキラースコップはビックリしてその手を止めた。

「ごめんね、今晩お部屋の隅っこを貸してほしいの。だめかな？」

寝床だけ得られれば十分だから、と空いているスペースを指して頼み込む紡宜。

キラースコップも最初はたくさんの魔物を引き連れて現れた紡宜に警戒の色を見せていたが、一度紡宜の“匂い”につられて近寄ってしまうと、不思議そうな顔をしつつも他の魔物たちと同様に甘え始めた。

「ふふっ、意外と甘えんぼな子が多いのねぇ」

もはや紡宜もその反応には慣れたらしく、何の疑問もなくキラースコップを受け入れた。意外にもスベスベした肌のキラースコップは、抱いていてとても気持ちがよかった。

散々甘えつくした後、キラースコップはドラキーたちを呼び集めて樹の頂上付近に生えている柔らかい木の葉を取って来てもらうように頼み、自分たちはせっせと客人（ツムギ）の歓迎を始めた。

「きゅ！」

「えっ　これ、くれるの？」

キラースコップは紡宜に木の実を差し出し、甲高い声で促して彼女の手に置く。そのまま驚く彼女を後に残して部屋の奥の方に入っていき、そこに貯めてある食料の中でもより大きな木の実や果物を抱えてまた戻ってきた。

森にすむ魔物たちにとって、大きな木の実や果物はとても大切な食料なはずだ。ただの客人である自分にそこまでしてくれるのは流石に……と紡宜は遠慮しようとしたのだが、嬉しそうに食料を並べていくキラースコップたちの熱気に押され、結局はその好意を受け取ることにした。

その後もキラースコップたちはまるで使用人のように働き、ホテル並みのサービスを受けながら紡宜が食事を終えると、そこにドラキーたちがとてつもない大きさの木の葉を運んでやってきた。どうやらこれを布団代わりにするらしく、キラースコップはそれを手早くたたんで紡宜の背ほどの大きさに畳んで床に敷いた。

この部屋に入ってきた途端に紡宜に群がり始めたドラキーたちを押しのけて、キラースコップはその即席ベッドに紡宜を案内する。『さぁ、うちの自慢の寝床へようこそ！』とでも言うかのように息巻いているキラースコップに導かれて、こっそり苦笑する紡宜。

しかし、ベッドに腰を下ろすと紡宜はその感触の柔らかさに驚き唖然とした。そのベッドは元々柔らかい葉を何重にも折りたたんで作っているので、まるでエアークッションのように柔らかかったのだ。

紡宜は思わずそのベッドに横たわって目をつぶってみた。程よい抵抗に全身がふんわりと受け止められ、何とも言えない木の葉のいい香りに包み込まれる。紡宜の心地良さそうな微笑みを見て、周りの魔物たちも満足そうに顔を見合わせた。

気持ち良さのあまり、自然と湧いてくる眠気に紡宜はそのまま身をゆだねた。この世界で目覚めてからずっと続いていた緊張の糸が切れたのだろうか。心配していたこと全てを忘れ、紡宜は夢の中へ深く溶け込んでいった。

やがて、紡宜の身体は規則的な呼吸に揺れ動き始める。彼女が眠り始めたと分かると、その場は静まり返り、魔物たちはそっとその場を立ち去るのだった。

翌日、紡宜は顔の周りで飛び回るドラキーの鳴き声によって朝を迎えた。目を開けた瞬間飛び込んできた『真っ黒』に一瞬息が止まったが、それがドラキーであると認識するとすぐに満面の笑みになった。

「ん～っ……ふわぁ……あ、おはよーツバサちゃん」
「きぃきぃ！」

猫のように伸びをして、身体に残った眠気を吐き出すように欠伸をする。隣で目をパチパチと瞬かせているドラキーの頭を撫でると、ドラキーは気持ち良さそうに目を細めた。

ドラキーはそのまま飛ぶのを止めて翼をたたみ、紡宜に寄り添うように座る。

「ツバサちゃんは朝から元気だねー。コウモリなのに、えらいえらい！」
「きぃ？」

よく解らない理論を持って褒められ、不思議な顔をして首をかしげるドラキー。しかし頭を撫でられるのは気持ちが良いため、素直にされるがままになる。

このドラキーは自分のベッドとなっている木の葉を持ってきてくれたドラキーの中の一匹だった。部屋に入って来たドラキーたちに熱烈にじゃれつかれた際、このドラキーが他のドラキーよりも少しだ

け大きい翼を持っているのに気づき、“ツバサ”と名前を付けたのだった。

他のドラキーの差異は今はまだ把握しきれていないので、こういう判りやすい特徴のある子は助かる。大きく立派な翼を持つツバサの頭を撫で、紡宜は問いかけた。

「ねぇ、ドロちゃんはどこ？」

見回してみるが、そこにはドロの姿がなかった。確かに寝る前までは一緒に居たはずだが、どこかへ出かけているようだ。

紡宜の言葉に、ツバサはキョトンとした表情を返した。ドロと言われてもピンと来ないのか、紡宜の言葉の意味を探るように見つめてくる。

そもそも、ドロという名前は昨日決まったばかりであり、会ったばかりの魔物がそれを知っているワケがない。紡宜はそのことに気付くと、ドロという名前が昨夜一緒に居たマドハンドを指すことを教え、もう一度尋ねてみた。

「きぃ、きぃきぃ」

翼を伸ばして、キィはその部屋の出口を指した。どうやら外に居るらしい。「分かった、ありがとう」とお礼の代わりに頭を人撫でし、紡宜はもう一度伸びをして部屋の外に出た。

部屋の外に出てみると、そこではもう既に魔物たちが活動を開始していた。

暖かい日の光の元、スライムたちはぴょんぴょんと飛び跳ねて遊びまわっていて、アルミラージなどは自慢の角の研磨に余念がない。唯一働いているように見えるのは懸命に穴を掘っているキラースコップたちだが、要するに皆それぞれ好きなことをしているだけのようだった。

相変わらず楽しそうな様子の魔物たちを見て微笑ましい気持ちになりながらも、紡宜はその大勢の魔物たちの中からドロを探すという作業を始めた。

「えーっと、ドロちゃんはー……ん？　あれ、何してるんだろう？」

マドハンドは魔物たちの中で最も小柄な種族の一つで、同じSサイズの魔物と比べてもかなり小さい部類に入る。雑多な種族が活動しているこの場所では見つけるのに骨が折れると思われたが、しかしドロは存外早く見つかった。大樹の根元、魔物たちが集まってガヤガヤ騒いでいるその中心にいたのだ。

ドロはしきりに地面を動き回っていて、それを取り囲む魔物たちはどこか議論を交し合っているようにも見える。ドロがかなり小さいために、魔物たちに取り囲まれているこの状況はイジメの現場のように見えなくもないが。

「……でも、それにしては和気あいあいとしてるよね」

紡宜は周りから浮いたその光景に首をかしげながら、しかしもし本当にドロがイジメられていたら大変なので、急いでドロの元へ駆け寄る。

紡宜が魔物たちの集まりに近寄ると、彼女に気付いた魔物たちは一斉にその足元に群がった。それによってドロも紡宜の存在に気付き、その動きを止めた。

「ドロちゃん、どうしたの？」

足元で甘え始めた魔物たちに身動きが取れずにいながら、ドロが何をしていたのかを確かめようと身を乗り出す。そこで、ドロが先ほどまで動き回っていた辺りの地面に何かが描かれているのに気付き、紡宜はそれに目をやった。

まず目に入るのは大きな建物の絵で、それを取り囲むように大きな樹、池、岩、草の絵が並んでいる。大きな建物の絵が気になったが、それよりもその近くにある大きな樹が目に留まった。

その樹の絵には特徴的な穴がいくつも開いており、螺旋状のでっぱりが絡み付いている。それをツタと見ることもできたが、紡宜にはその樹の絵がここにある大樹の絵にしか見えなかった。

「これってもしかして、この場所の地図？」

もしやと思いドロに尋ねると、ドロは手をグーパーして『肯定』の合図を示した。どうやらドロは地図を描いていたようで、周りに居る魔物たちはその地図に意見を出し合っていたようだ。

「うわぁ、ありがとうドロちゃん！　すっごい絵上手だね！」

感激して褒め称える紡宜に、ドロは軽く手を握ったまま応えた。完全に握った状態で手首を折るのが『否定』だとすれば、これは『謙遜』だろうか。どことなく照れたような、クールを装っているよう

な雰囲気が感じられる。

地面に描かれた絵は今ここにある大樹の形にそっくりであり、とても魔物が描いたとは思えないほど判りやすく描かれていた。ドロには芸術センスがあったようだ。

紡宜はドロの特技に“絵”を覚えつつ、その地図を観察し始めた。

「まずこれは――池の絵だよね？」

ドロに確認しながら地図の情報を頭に入れていく。ドロは紡宜の質問に一度『肯定』を返して、そのまま地図を真剣な顔で見つめる紡宜の前に佇んだ。

大樹の傍に描かれている池らしい絵は、恐らく昨日ドロが言っていた『水のある場所』だろうと思われる。どれくらい離れているのかはわからないが、大樹のすぐ傍に描かれているところを見るに少なくとも一日で辿り着ける場所にあるはずだ。

とりあえず今日、真っ先に行ってみるべきなのはここかな、と紡宜はこの日の予定を組んだ。

「次は――岩の絵かな？」

池の絵の隣に描かれているのは岩の絵だった。この見上げるほど高い大樹と比べても三、四倍の大きさで描かれているので、岩と言われても少し想像がつかないのだが。

だが、ドロが実物とこの絵の大きさを比例させているとすれば、この岩は明らかに大樹よりも大きいということになる。もしやこれは

岩山ではないのだろうか。
もし岩山がここにあるとすれば、そこに登ってこの辺り一帯の地理を把握することが出来る。紡宜は出来ればこの岩山にも行ってみようと決めた。

「それで、これは草の絵、と。――もしかして草原があるのかな？」

続いて描かれているのは草の絵。これも大樹とほぼ同じ大きさに描かれているが、流石に草の背丈が百メートルもあるというのは考えづらい。異世界ならばあながちあり得ない話でもないかもしれないが、どちらかと言うと広範囲にわたって描かれている草の絵は、原っぱや草原を表そうとしているように見えた。

その考えで合っているかどうかをドロに尋ねると、ドロは『肯定』を示した。自分が目覚めた場所が芝の原っぱであったため、紡宜はそれが広くなったようなものだろうと当たりを付けた。

最後に、と紡宜は残った絵に目をやり、そこで黙り込んだ。

黙り込んで、しばし睨むようにその絵を見つめる。決して絵が理解できないのではなく、確かに他の絵と同様に上手なのだが、その絵が差しているものが問題なのだ。考えがあっているとするならば、自分が異世界に来てしまったことを示す絶対的な証拠となる。

思わず寄る眉間のしわを抑えて、紡宜はため息を吐いた。どちらにせよ訊かねばならないのだから、ここで戸惑っていてもしょうがない。

「えーっと、これって……もしかしてお城かな？」

紡宜は恐る恐る、自分の考えを口に出してみた。その気持ちは、当たっていれば人に会えると期待する反面、この世界を“異世界”として完全に認めることに対しての恐れがあった。

樹・池・岩・草の絵に囲まれて、それらの真ん中に鎮座するように描かれているその巨大な建物は、どこからどう見てもお城だった。岩山と同規模の大きさで描かれており、絵からしてその迫力が伝わる。

まさに“この世界”を代表する建築物。どうしてここまで細かに描けるのだろうと嘆息してしまうほど、自分のイメージの中にある『お城』を明確に描き表わしている。

「……」

紡宜の問いに乗せられた「外れていてほしくもあるが、当たっていてほしくもある」という曖昧な思いを察したのだろうか、ドロは少し戸惑う素振りを見せた。

しかし、紡宜じっと見つめる前で、ドロは諦めたように手首を折ると、静かに『肯定』の合図を示した。やはり、そういうことであるらしい。

「……はぁ～……」

ドロの返事を見て、紡宜はなんとも気の抜けた声を漏らした。

これで、自分が異世界に来てしまった決定的な証拠が挙がってしまった。大樹、魔物、城、どれをとってもここが異世界であるということに揺るぎはない。それも、自分の知っている空想の“異世界”

である。

解ってはいるが、こうして証拠を突きつけられると、どうしてもその事実に反発する気持ちがむくむくと湧き上がって来てしまう。

（もう、覚悟してはいたけどさ……）

「もじゃ？」

落ち込む紡宜を見て、心配したももんじゃが声をかけた。紡宜が悲しむことを心底不安に思っているような顔だ。紡宜はその顔を見て、一言「なんでもない、大丈夫だよ」と言って頬を撫でた。

この世界を認めるのに、この子たちの存在が大きな助けになった。もしこの子たちが居なかったら、自分はこの世界を本気で疎んでいたかもしれない。

だから、この世界に生きているこの子たちに、この世界を拒んでいる自分が居ることをを知られたくない。紡宜はその自分を隠すように、にっこりとほほ笑んで見せた。

「とりあえず、今日はこの池に行ってみる。時間が勿体ないからね。落ち込むより先に、情報収集しなきゃ！」

その笑顔にとりあえずは安心したらしいももんじゃを足元から除けて、紡宜は近くに置いてあった通学カバンをを開き、ノートとしたじき、シャープペンシルを取り出した。元々通学カバンなので、これでもしばらくは書く物には困らない。

ドロの地図の傍に座り込み、その地図を綺麗に写し取っていく。や

がてそれも終わると、紡宜は再び立ち上がって周囲を見渡した。

「よし、みんな！　今日は池に行くよ！！」

応！と一人張り切るも、魔物たちは人間の号令など知らない。そのリアクションの薄さにほんのちょっぴり涙をこぼしつつ、紡宜はドロを先導に池に目指して出発した。

第5話　「不穏の原因」

紡宜が地図に示された“池”に向かって出発する頃、周囲を森に囲まれた国――エダハの国の王宮は、普段よりも幾分か慌ただしくざわついていた。

「失礼します、陛下！」

一人の兵士が王の元に急ぎ足で訪れる。王は玉座に座してその報告を待っており、周囲には王の家臣たちが数人待機していた。

通常は召集でも無い限り一介の兵士が王に謁見することは許されないのだが、今回のような任務の最中はその許しを得ることなく王に任務の報告をすることが出来た。それは任務の報告を速やかに行うためであり、またその内容をあまり周囲に広めないためでもあった。

玉座の前で急停止した兵士は、すぐさま膝を折り、必要最低限の敬礼をして王に向き直った。

「何だ、何があった」

王はその兵士の様子を見て、少しだけ目を鋭く細めた。

兵士は王の目の前であるというのに、息遣い荒く急いできた素振りを隠そうともしない。それは礼儀としてあまり好ましくないのだが、それを忘れるほどまでに急いできたということは、何よりも優先して伝えるべき報告があるということだ。

家臣たちもそれが判っていて、あえて注意しようとはしない。兵士

の様子に不吉な予感を抱きながらも、静かにその報告に耳を傾けていた。

「実は、世界樹の森に異変が」

「なに？」

言いづらそうにしながらも、兵士はしっかりとした口調で報告を読み上げた。その言葉に不穏な雰囲気を感じた王は眉間を険しく寄せる。周囲に緊張が増し、中てられた兵士は身を固くした。

迫力に押され息を詰まらせる兵士に、王は「楽にしていい」とその緊張を解かせた。

「詳細を話せ」

「はっ！」

身じろぎをして身体の硬直を回復した兵士は「まだ確たることは判りませんが」と前置きをして報告を始める。

「陛下のご命令により異世界の旅人の捜索を始めました。しかし、世界樹の森に足を踏み入れて間もなく、魔物たちの襲撃を受けました。襲撃を受けたのはラグナロク様率いる第一兵隊。現在捜索を一時中断し、場内にて待機中です」

兵士の報告に、周囲の緊張が更に強くなった。王は目を見開きわずかに眉根を寄せ、家臣たちは俄かにざわめき始めた。

エダハの国は多種多様な魔物たちの住む森、“世界樹の森”に囲まれて存在する。国と森は城より高くそびえる城壁によって分かたれており、翼を持った魔物が時折侵入してくる以外、森の魔物たちに

侵攻される危険はない。

また、国唯一の出入り口である城門付近は森の中でも比較的弱い部類の魔物たちが集まっており、国から外に出る場合も兵士が同伴していれば殆ど問題ない。城門の外に生息する魔物たちは臆病で穏やかな気性のものが多いため、警護もし易いのである。

しかし、その魔物たちが今回に限って兵士に牙をむいたという。それは、その魔物たちが住む森に囲まれているこのエダハの国が危険に晒されているということだ。

鍛錬を積んでいる兵士たちはともかく、一般の国民に魔物たちと戦う術はない。もしこの森に住む魔物たちが一斉にエダハの国に牙を剥けば、兵隊たちではとてもじゃないが庇いきれない。

「遭遇した魔物が低級の魔物であったため負傷者はいませんが、事態の原因が判明しない限り対象の捜索は難しいかと思われます」

「うむ……」

兵士の報告に、王は重々しく唸った。

例の旅人の捜索は続けたいが、国の一大事かも知れない今、国の安全と旅人一人の捜索どちらを優先させるかなど考えるまでもない。

信頼する忠臣――ねこまどうのルースの嬉しそうな顔を考えると少しやりきれない気持ちもあったが、王は旅人の捜索を諦めて兵士に新たなる命令を告げた。

「分かった、旅人の捜索は中止する。だが、発見し次第保護するように。最優先事項は事態の究明とその解決、良いな？」

「はっ！」

敬礼をしてその命令に応えた兵士は、もう一度敬礼をするとまた急ぎ足でその場を後にした。その姿が見えなくなったと見るや、王は我慢していたように大きくため息を吐き、目を瞑り身体の力を抜く。

「久しぶりに楽しみが出来たかと思えば、すぐこれか」

再び目を開いた王は、虚空を見つめながら心底残念そうに呟いた。

ルースの“占い”は、この国に関わる重大な未来を予言する。しかし、その特性故にどうしても悪い結果が知らされることが多い。今回のように占った本人も期待できるような良い結果が出ることは珍しいのだ。

だからこそ余計に惜しまれる。久しぶりに出た良い結果――国にとっての重大な好機を、国の危機という最悪の状況下で見逃さなければならないことを。

「何故このような時に……」

ルースが嬉しそうに話した、この国に良い未来をもたらすであろう“異世界の旅人”。

旅人が戦闘能力を有していなければ、この国に辿り着くことは不可能だろう。この国に通じる城門はたった一つであり、城壁を伝って城門を探したとしても、幾度となく魔物たちに遭遇するはずである。

一度であれば逃げられるかもしれないが、このような森で騒ぎを起こせば、あっという間に魔物に囲まれることとなる。そんな旅人を

待っているものは、誰にも知られない静かなる死のみだ。

もっとも、魔物が活発化しているらしい今、戦闘技能を持っていたとしても無事で居られるかどうかは怪しい。城門付近は低級の魔物ばかりが生息しているが、それも少し離れると様子が違ってくる。ドライゴンやゴースト、ガンコどりなど、奥に行けば行くほど魔物たちは凶悪になっていくのだ。

いくら兵士が鍛錬を積んでいると言っても、そのような場所に探索に向かうのは無謀だ。ましてやこの世界に来たばかりでこの森のことを何も知らない旅人には、そこからの脱出など望めるべくもない。

「仕方ない、か」

なぜこの国内に直接降り立ってくれなかったのか。このような事態でなければ手厚く歓迎出来たものを。せめてあと1日早ければ発見できたかもしれなかったのに。

口惜しさは残るが、最早そのようなありもしない可能性を並べても意味がない。そもそも、旅人の捜索を諦めざるを得なくなったこの現状、この国の存亡に関わる事態に陥っているのだ。いい加減臍を噛んでばかりもいられない。

得られなかった幸福を羨んでいては、いつまで経っても前には進めない。王はこの話を無かったことにして忘れ去ることで、現状に向き合う心構えをつけた。

そんな時――

「マスター」

小さく、しかしよく通る低めの声が玉座の間に届いた。その声に気付いた王は、その発生源を振り返りみた。

玉座の間に続く回廊から姿を現したのは、一般兵とは異なり彼ら種族特有の鎧を身に纏う竜人の兵士。先頃襲撃を受けて待機中となっているはず第一兵隊長――かつて旅の苦楽を共にしたパーティーの一角、リザードマンのラグナロクだった。

「どうした、まだ何か報告があったのか」

その姿が目に入った途端、王の表情が変わった。どこか安心したような、それでいて険しく引き締まったように見える表情。それは付き合いの長さから来るものであり、また信頼の大きさによるものでもあった。

「ああ、少し気になったことがあってな」

その王の問いに気安く答えながら、ラグナロクはさして礼儀など頓着した様子も見せず王の傍まで近寄ってきた。周りに居る家臣も、それを咎めることはない。

魔物であるラグナロクにとって、王は“エダハの国の王”である前に“自分の付き従うマスター”なのだ。旅の終わりにこの国の兵隊長を任されたが、自分の居場所は何をおいてもマスターの傍でしかありえない。ラグナロクはその考えに基づいて行動し、周りもそれに対応した。

魔物とはそういうものであり、そもそも自分の決めたマスター以外の人間のいうことなど聞くはずがない。この世界に生きる人間にと

って、それは当然の常識だった。

「それで、どうした。お前の部隊が魔物に襲撃されたと報告を受けたが」

「その通りだ。城門を出てほんの少しのところでな。大した魔法も使えない魔物たちばかりだが、集団でかかってこられると少し辛い」

ラグナロクは渋い顔をして頷いた。今回は被害もなくすぐに退却できたが、この先ずっとこれでは原因の究明より前に甚大な被害を被ることは明白だろう。

ラグナロクはそうなる前に、先鋭を集めたパーティーを作ることを進言した。このように魔物にたびたび襲撃されるような状況では、大人数で行動することはかえって被害を大きくするばかりである。

その人数の多さゆえにどうしても行動が鈍くなり、魔物に見つかる可能性が高くなる。収拾を付けるのが困難になるばかりか、広範囲に影響を及ぼす攻撃の標的にもなり易くもなってしまうのだ。

迅速に行動できる者が5名、それが今の状況下では最適な人数だろう。

「分かった、すぐさま必要な人間を揃えよう。後は何かあるか？」

王はその案を認め、他に報告することはあったかと考えるラグナロクを後目に、近くの家臣に目ぼしい人員の召集を頼んだ。

この程度の要請であれば先の兵士に言づければ済むことなのだが、マスターにのみ従うラグナロクに他の人間を頼るという考えはない。どんなに些細なことでも、ラグナロクは自分でマスターに報告をす

ることにしていた。

「ああ、そうだ。そういえば、気になることが一つあったんだった」

「気になること？」

忘れるところだった、と呆けるラグナロクに王は復唱して尋ねた。

思い返してみれば、ラグナロクは元々気になることがあると言ってこの部屋を訪ねてきたのだった。

「そう、魔物たちの襲撃を受けたときなんだがな、どうも魔物たちが興奮しているように感じたんだ。反撃を受けても退こうとしない。まるで俺たちの侵入を拒んでいるかのようだったな」

ラグナロクはその時の光景を思い出しながら言葉にしていく。その報告を聞きながら、王は黙って考え込み始めた。

「魔物たちが、我らを拒んでいた、と」

「少なくとも好戦的ではなかったようだが……そうだな、子を守る親の姿に似ていたか？」

ラグナロクは顎に手を添え、王と同様に考え込む姿勢を取った。そしてまた何かを思い出したように顔を上げると、王に報告を続けた。

「あと、城外に出て少し森の中に入ったところで妙な気配を感じたような気がしたな」

「妙な気配……？」

「その気配を追おうとしたところで魔物たちに襲われたわけだが。あれは――魔物たちの巣がある方向だったかな」

（何かを守ろうとする魔物たち……そして妙な気配……もしやこれ

は……？）

ラグナロクのその報告を聞いた瞬間、王の頭に一つの可能性が浮かんだ。それは、この緊急事態の現状を把握する一つの手掛かりだった。

「なあ、ラグナロク。もしや、魔物たちは我らを侵攻を拒んでいたのではなく、その巣に生まれた――もしくは訪れた“何か”を守りたかったのではないか？」

「その可能性は俺も考えた。だが、一匹ならまだしも魔物たちが全員で守ろうとするモノなんてあるか？」

確かにあそこに住む魔物たちは種族関係なく仲が良いし団結も強い。しかし、それでも全員で身を呈して守るモノがあるとは思えないと反論するラグナロクに、王は鷹揚に頷いた。

「確かに、普通ならそうだろう。しかし今は緊急事態下。普通に考えていてはいけないのだ」

「……見当でも付いているかのような口振りだが？」

「見当、というよりも希望だな」

どこか確信を得たような表情の主にラグナロクは探るような目で尋ねた。

この男はいつも自分だけ状況を理解して一歩引いたところから見て楽しむという癖があり、こういう困った状況では周りが積極的に彼の考えを読み取るということをしなければならなった。

「国の危機だぞ。王として皆の不安を解いてやれよ」

「不安を解くにはその原因を明らかにすることが先決だろう。お前も先鋭部隊に加わってもらうから、そのつもりで準備しておけよ」

王はそれだけ言うと会話を打ち切って少数先鋭の部隊の準備に取り掛かっていった。ラグナロクは結局何も判らないではないかと苦悩にため息を吐き、来た道を引き返していく。

「……マスターのあの様子、ルースの占いに関係があるんだろうな。一応、俺も聞いておくか」

そして、長年の付き合いから主の考えの出所に当たりを付けると、少しでもその考えを理解するために同じパーティーの仲間の元へと足を運んでいった。

目覚めてすぐ、朝早くに大樹を出発した紡宜は、昼前にはすでに“池”に到着していた。水場と聞いてある程度の期待を持っていた彼女は、その光景に大いに落胆して肩を落とした。

「確かに、水場だけど……。そっか、そうだよね、絵じゃ判らないよね……」

目線を足元に落とすと、その場を歩いたせいで靴に泥が纏わりついているのが見えた。新しい靴ではなかったためそこまで気にはしないが、もはや学校に履いていく気にはなれない。

辺りは一面泥に覆われていた。水分を多分に含んだ泥は確かに水の

存在を表しているが、これでは池と言うよりも沼である。言うなれば超巨大な水たまり。

大きな樹は少なく、どちらかと言うと背丈の低い草が多く生えている。いわゆる水草と言うやつで、何の手も加えられていない水草たちは水場を支配するように覆っていた。

「うーん……まあ、ここに住む子たちにとっては重要な場所なんだろうけど」

ここに着いた途端に泥遊びを始めたスライムとスライムツリーの子供たちを見つめ、紡宜は少し煮え切らない表情で頷いた。

因みに、ここに来ると言って付いて来た魔物たちはドラキー、スライム、スライムツリー、ホイミスライム、ドラゴンキッズといった、スライム系と飛行できる者たちだけだったのだが、現在この場にはそれに加えて新たにキャタピラーとぐんたいアリが増えていた。

自然に囲まれて育ったおかげで紡宜には虫に対しての抵抗というものが無く、出会った端から興味の赴くままに近づいた結果、これら二つの種族だけで数十匹にもなる大集団を形成してしまったのだ。もっとも、手のひらサイズを超えるような大きさのアリと芋虫に平気で近づいていける女子と言うのは、元の世界でも紡宜だけだったのだが。

見る見るうちに泥だらけになっていく魔物たちに、体を洗うとかそういう概念は無いのだろうかと紡宜が考えていると、遠くの方に泥の中で動く集団が目に入った。

「んー？　あれは……」

泥を体に纏っているのか、地面と同化していて遠目からではとても判別付きづらい。小柄な生き物であることは確認できるが、魔物であるのか普通の生き物であるのかさえ分からない。

遊びに夢中になって気付く様子の無い魔物たちを後目に、紡宜は足元に気を付けながらその動く集団に向かっていった。

恐る恐る泥を跳ねさせないように近寄り、やがてその姿が認識できるほどの距離に立つと、その動く集団はこちらの動きに反応して動きを止め、一斉にこちらに振り返った。紡宜も同様に動きを止めて向かい合う。

「おおう……これはホラーだね……」

それは、マドハンドの群れだった。半身を泥水につけ、ニョキニョキと手だけを沼から生やしている。それら全てがこちらをじっと見つめているような気がして、流石の紡宜も心持ち引いた。

思わず足元に居る、他の魔物たちのように泥遊びをすることなく付いて来たドロに目をやった。ドロは目の前の集団に対して、特に何の行動を起こすこともなく、じっと固まっている。紡宜と出会ったときのように相手の反応を待っているようにも見えたが、こうもリアクションが無いと感情が伺えない。

どうやらここはマドハンドの生息地であるらしい。ドロと出会ったのもこの近くであることから、紡宜はこれらのマドハンドがドロの家族ではないかと推測した。

「ねぇ、ドロちゃんはここから来たのかな？」

足元に居るドロと目の前のマドハンドの群れを見比べながら紡宜は尋ねる。自分に問いかけられた言葉には正確に反応するドロは、見上げるように手のひらを紡宜の方に向け、『肯定』の合図を返した。

自分の考えがあっていることに納得して頷く紡宜。しかし、それにしてはマドハンドたちに一向に近寄って来る気配がなく、ドロも近づこうとしない。まるで見えない壁で隔たれているかのようだ。

同じ群れの同種族ならばもっと親密なモノなのでは？　と紡宜は違和感を抱き首をかしげた。これまで見た限りではドロは他種族とも隔たりなく行動しており、大樹では一緒に地図を描き上げるというコミュニケーションも見せていた。

では、この隔たりは何なのか。物質系は家族との距離感が他の種族とは違うのか？　考えられる可能性は――

「あ、私じゃん」

灯台下暗し。というか、もうそれが答えだろうと思い当たる最大の可能性。それは紡宜という見知らぬ人間の存在だ。

大樹では露骨に警戒されていたから、ここのマドハンドたちの微妙に発せられる緊張感という程度の警戒ではすぐに気付けなかった。確かに警戒されて当然である。最初から好意的に歩み寄ってきたドロが異端なのだ。

ドロはまだ好奇心旺盛な子供なのだろうか、と紡宜は考えながら、学校指定のスカートが泥に浸からないように気を付けて膝を折った。地面から生える手に目線を合わせることはできないが、自らしゃが

んで小さくなって見せることで、多少警戒心は薄れるはずだ。

「ここでドロちゃんのお母さんが居たら『どこでそんな人間連れて帰ってきたの！　元居た場所に返してきなさい！！』って怒られるところだけど、迷惑はかけないし、何もしないから、ね？」

まるで捨て犬を拾ってきた子供を叱る母親のようなセリフを口にしながら、とりあえずニュアンスだけでも伝われば良いと紡宜はマドハンドたちに手を伸ばした。

マドハンドたちは今までの静止を解き、かすかに指先をピクピクと動かし始めた。動揺しているのか、何かを話し合っているのか、いずれにしてもようやく生き物らしい動きが見えたことに紡宜は安堵の息を吐いた。

ドロが握手に応じたように、他のマドハンドたちにも握手は友好の証だと伝わるはずだ。紡宜はその構えのままじっとマドハンドたちを見つめ、その反応を待った。それが数分続こうかとした時、今までずっと静かにしていたドロがすっと紡宜の前に出た。

「ドロちゃん？」

何をしようとしているのか、紡宜とマドハンドの群れの両方に関わる存在として仲を取り持とうとしてくれているのか。紡宜はドロに声をかけて様子を伺った。

ドロはそのまま紡宜の前を進んでいき、やがてマドハンドたちの隣に立った。その行為に他のマドハンドたちも不審に思ったのか、ドロの方に注目が集まる。

そして、ようやくその行為の意味に気付いたマドハンドたちの群れは、一斉にドロの背後に集まった。

「え、なに……？」

一人だけ置いてけぼりを食らった紡宜はオロオロとしながらもその行為の意味を必死に見出そうとしていた。すぐさま、マドハンドたちの中の一匹が紡宜に手招きをして呼び寄せる。

どういう訳か判らぬままにいきなり呼び寄せられた紡宜は、狼狽しながらもその手招きに従って近寄り、他のマドハンドたちと同じように身を潜めてうずくまった。マドハンドたちは出来るだけ密集するように固まっていたのだ。

「なにか、危ないものでもあるの？」

その姿には物質系にしては珍しい焦燥と恐れの色が滲み出ていた。紡宜はその答えが聞けるのはドロしかいないと思い、その後ろ姿を見る。そこでようやく、ドロの背中越しに遠目からでも判るその大きな体が目に入った。

———グルゥルゥルァァァ！！

「うそ……ガメゴン！？」

小さな突起に覆われた青黒い皮膚。多少の攻撃ではビクともしない重厚な甲羅。人の腕ほどの太さを誇る二本の角。そして、絶えず睨みつけているような眼と威圧的に鋭く尖った牙。

魔物たちが穏やかに暮らす平和な森に、カメのような出で立ちのドラゴン系の魔物、ガメゴンが現れた。

遠くから轟くガメゴンの鳴き声に、空気が振動して衝撃が肌に伝わる。身を寄せ合うように集まっていたマドハンドたちは更に小さく固まり、ドロはそれらを守るように静かに群れの前に進み出た。

ドス、ドス、ドス、と確かな重量を持って打ち鳴らされる地面は、沼地のせいもあって大きく沈み込みその巨大な足跡を残している。近くに同じような足跡は見かけなかったことから、ここに生息しているわけではなく、偶にここを訪れるのだろう。

「お、おっきぃなぁ……」

紡宜は初めて出会うその迫力に中てられて暫し呆然と立ち竦んだ。

たまたま出掛けて来た沼地にあんな魔物と出会うなんて、ずいぶんと間の悪いものだ。あの攻撃的な様子では、触れ合う前に攻撃されてしまうに違いない。どうにか仲良くなってあの背に乗って回遊してみたいとかそんな浦島チックな妄想が頭に浮かぶけど、流石に身を危険に晒してまで欲望を満たそうとは思わない。

なにしろ相手はあんな形でもドラゴン系である。どうみてもカメなのだが、ドラゴン系は気性が荒く人に懐きにくい。この辺りには低レベル層の魔物しかおらず、ドラゴン系でもドラゴンキッズしか見当たらなかったことで油断してしまった。

「みんな、集合!!」

紡宜は大声と身振りで大樹から付いて来た魔物たちに集合をかけた。泥遊びに夢中になっていた魔物たちも先ほどの鳴き声でガメゴンに気が付いたらしく、怯えた様子で一目散に駆け出してきた。マドハンドたちは紡宜には警戒を向けていたが、他の魔物たちには近寄って来られても何の反応も見せなかった。

ガメゴンは集まった大勢の魔物たちを前にして、立ち止まって鼻息荒く威嚇し始めた。大きな唸り声と共に前傾姿勢になり背中の甲羅を大きく見せる。紡宜はすっかり怯え切ってしまっている魔物たちを撫でて宥めながら、冷静にガメゴンを観察していた。

（これだけ魔物たちが集まっても動じない……それにこの子たちの怯えた様子……間違いない、あのガメゴンがこの辺りのボスね）

ガメゴンの能力を考えてみても、ドラゴン系ということでまず攻撃力がずば抜けて高い。ＭＰの他には然程驚異的な能力は無いのだが、早々と伸びる防御力と持続的に伸びる攻撃力、平均よりも高めのＨＰとＭＰと、暴力と恐怖でこの辺りの低ランク層の魔物を制圧するには十分なポテンシャルである。

能力面でいえばここに居るスライム系の魔物たちの方が平均的に高めに育ち、覚える能力も扱いやすいものばかりなのだが、如何せん性格的に争いごとを好まないのだろう。そういう意味でも攻撃力に秀でているというのはガメゴンにとってアドバンテージになる。

しかし、性格的に凶暴で攻撃力に秀でた体の大きい魔物と、穏やかな性格で万能型の能力を持ちとても体の小さな魔物。自然界の中では圧倒的に前者が優位に立てるが、指導者がいればその差はあっという間に逆転する。

誰かこの群れの中で一匹でもあのガメゴンに対抗心があれば、十分互角に戦えるのだが。

ふむ、と紡宜はこの場を見渡して考えてみた。足元で固まっている魔物たちは皆怯えきってしまっている。ブルブルと身を震わせているこの子たちをどうにかしてあげたいという気持ちが沸き立つ。ならば――

「ねぇ、ドロちゃん。あのガメゴンはこの辺りの皆をいつも怖がらせてるの？」

紡宜は集団の先頭に立つドロに問いかけた。紡宜の質問には今までずっと向き合って答えてきたドロは、初めて紡宜の方を向くことなく、手を一度握りしめて『肯定』を表した。

ドロは緊張している。それだけこのガメゴンは手強く、厄介であるらしい。この辺りを住処としているマドハンドだ、ぶつかり合ったこともあるのだろう。もしかしたらドロはいつもこのように群れの先頭に立ってきたのかもしれない。

ただ一匹で群れを負って立つドロの背中に覚悟を見た紡宜は、その思いを確たるものへと変えた。

「じゃあさ、ちょっとあの子をこらしめてあげてみない？　こんなに皆を怖がらせて、悪いことしてるのを止めさせないと、ね？」

ドロは驚いたように紡宜の方を仰ぎ見た。紡宜はそんなドロに柔らかく微笑んで、ゆっくりと隣に立つ。

「ドロちゃん、やるよ。皆を守るために頑張ろうね」

第6話　「モンスターマスターの出来ること」

魔物という生き物は普段、群れの中で生きている。森や草原などの一つの地域（エリア）に数種族から成る大規模な群れを作り、更にその中に二、三匹のグループをいくつも作り、行動を共にする。これは同程度のレベルの魔物が集まったもので、家族のような集まりというよりは、むしろ戦うために集まった仲間のようなものである。

また、魔物は子供が生まれると群れ全体で育てるという性質を持っているが、その子供は生まれたばかりでも本能的に戦うことが出来るので、ほとんど独りでに育ち、勝手に同時期に育った魔物たちでグループを作っていく。そのような仕組みで地域内のレベルは統一されていく。

しかし、中には一匹狼となって単独で生きていく魔物もいる。同時期に生まれた子が居なかったり、同レベルの仲間が居なかったりと理由は様々だが、得てしてそういう魔物たちは群れの端で生きることとなる。

一匹で戦う内に自然と性格が攻撃的になるケースが多く、群れからはあっという間に孤立する。更に、グループで行動する魔物たちと比べるとどうしても戦力的に脆くなってしまい、立場はどんどん弱くなっていく。やがて同族からも忌避されるようになり群れの中心から離れていくと、他種族の魔物や人間たちに迫害される可能性も高くなってくる。

そんな魔物たちが生き残る道とは、他の低レベルの種族の群れに紛れ込むことしかない。グループで向かって来られても押し切ることが出来る程度の群れであれば、一匹だけで居ても何の問題もない。

また孤立するにしても、畏怖されることで孤立するならばむしろ好都合なこともある。

各地域に一匹ずつ程度存在する、周りの魔物たちよりも一段階レベル上の魔物――通称“ボスモンスター”と呼ばれる魔物は、こうして誕生する。そして各地を巡る冒険家や旅人たちは、そのボスモンスターを倒すことで初めて、その地域を踏破（クリア）したと認めれるのだった。

この付近を支配するボスモンスターのガメゴンは、怯えているが退く様子の無い魔物たちと、一匹のマドハンドと共に立ち向かう意思を見せている人間に、徐々に苛立ちを見せ始めていた。

「グルルゥゥゥ……」

「ぴィっ……！」

「落ち着いて、皆。大丈夫だから」

このままここで固まっていれば戦闘の被害を受ける恐れがある。紡宜の背後で怯える魔物たちの中にも闘える者は居るだろうが、それを探す時間は今は無い。

実力未知数の魔物たちを危険に晒すよりも、目の前の敵に率先して立ち向かったドロに任せた方が安全である。そう考えた紡宜は他の魔物に沼から森への入口に指を差し向けて避難を促した。

「皆はあの木の辺りまで離れて、そこでじっとしてて。いい？」

途端に、魔物たちは戸惑った様子を見せる。

単に指示されることに慣れていないこともあるが、それに従ったとして紡宜が目前（ガメゴン）の敵と戦おうとしていることが解っているのだろう。今出会ったばかりのマドハンドたちでさえ紡宜を心配する素振りを見ている。

自らに寄せられる気持ちにどうしても嬉しさを感じてしまう紡宜は、隠しきれない照れたような苦笑を浮かべて近くにいたツバサを抱き上げた。

「ツバサちゃんには皆を引っ張って行って欲しいんだ。大丈夫かな？」

「きぃ……」

ツバサは頭を撫でる紡宜の手を見上げ、次いで不安そうな瞳を紡宜の顔に向ける。

「もし私たちが負けそうだったら、迷わず逃げて帰っていいから」

優しく告げる紡宜に、ツバサはブンブンと首を振る。断固としてそれを認めようとしない姿勢だ。

実はツバサは大樹に住むドラキーたちの中で実質的なリーダーのような存在であり、大樹を出て紡宜と一緒に沼地に行くことが決まったとき、他の魔物たちから「何かあれば紡宜の役に立ってくれ」というような役割を与えられていた。

実質、それは警護を兼ねたものだったのだが、平和なはずの森の中で運悪くガメゴンに遭遇し、更に常に傍にいるように決めていた紡宜から「離れているように」と言われてしまうと、果たしてどの役割を全うすればよいのか判らなくなった。

しかし、直ちに助けに入ることができる程度離れることならばまだ頷けるが、危険になれば帰れなどと言われてもその命令を受け付けることはできない。紡宜がなんとかして自分たちを逃がそうとしているのが読み取れたツバサは梃子でも動かぬといったように紡宜の腕の中にうずくまった。

「ねぇ、ツバサちゃん――」

「グガァァァアアア！！！！」

しかし、もう一度念を押して説得を試みようとしたのを遮るように、ガメゴンが突然大きな咆哮を上げた。驚いた紡宜がガメゴンの方を振り返ると、ガメゴンはいい加減待ちきれないといったように前進を始め、距離を詰めてきていた。

ガメゴンとの距離は目測にして十数メートル。いくらガメゴンが素早さに難があるとはいえ、緩やかにでも加速を続けていればあっという間に潰される距離だ。

「皆、早く！！」

再び足元の魔物たちに向き直った紡宜は、声を荒げて皆に指示を飛ばした。そして、腕に抱えたツバサを優しく放るようにして宙に投げ出す。宙に投げ出されてしまうと、流石のツバサも飛び立たざるをえなくなった。

空を飛ぶツバサなら、皆の先導となりやすいはずだ。紡宜は最後ににっこりと微笑み、ツバサを送り出した。

「頼んだよ、ツバサちゃん」

紡宜の腕から離れたツバサは羽ばたいて体勢を立て直しながら、後ろ髪を引かれるような目を紡宜へ向けた。しかし、これ以上食い下がっても無駄だと判断したのか、最後に小さく「きぃ」と鳴いて直ぐに指定された木へと向かっていった。

続いていく他の魔物たちを後目に、紡宜は緊張感を高めてガメゴンに向き直った。隔たれた距離は最早数メートル。一切の躊躇も、思考の猶予も許されない。

「もうちょっとくらい待ってくれても……！」

急ぎ、半ば倒れるような前傾姿勢で魔物たちが逃げた方向とは逆の方向へと駆け出す。いくら田舎育ちとは言え、砂利道ならまだしもぬかるんだ泥道では上手く走り出せない。

ドドンッ、ドドンッ、とガメゴンが直ぐ近くで地面を踏み鳴らす音を聞き、足腰がだいぶ無理な動きをしていることを自覚しながら、紡宜は草の生える場所へ足を大きく伸ばした。

「……っと！」

草がクッションとなり、滑ることなく綺麗に着地できた。その勢いを殺さず、紡宜は草の生える場所を探して沼地を駆け抜けていく。ガメゴンから目を離してしまった紡宜は、首だけを捻って背後に居るはずのガメゴンを探した。

ガメゴンは紡宜たちが居た場所を少し外れたところに居た。突進の方向を急には変えられなかったのか、走ってきた進路はほぼ一直線だ。憎々しげな唸り声を漏らしつつ、地団駄を踏んで暴れているように見える。

そのまま今度はガメゴンから目を離すことなく走り続け、大きく距離を取っていく。

「……？」

ようやく先ほどまで空いていた距離と同じくらい離れた紡宜は、そこでガメゴンの様子に首を傾げた。

依然、ガメゴンは懸命に足踏みを繰り返している。地団駄を踏んでいるのかと思ったが、どうもそうではないらしい。いくらなんでも時間が長すぎる。たった一度の突進を躱されたくらいで、そう悔しがるとも思えない。

先ほどの威嚇行動をまた続けているのかと考えた紡宜は、しかしその視線の先が足元にいっていることに疑問を抱いた。威嚇行動ならこちらを睨んでいるのが普通だと思えるのだが、これは一体どういうことだろうか。

「グアッ！！　グアッ！！」

ただ突進が外れて悔しがっているとも思えないし、何より必死な様子が見て取れる。地面を踏み均そうとしているようにも、足に付いた泥を嫌がっているようにも見えるが、沼地に住む亀のような魔物が今更そんなものを気にするはずもない。

足元に何かあるのだろうか。ガメゴンを嫌悪させる何かが。ただ、泥が飛び散っているだけのように見えるが。

（……泥？）

そこでふと気付く。一緒に居たドロはどこに行ったのか、と。

「あっ……！」

紡宜が息を呑んで目を凝らしたその先、ガメゴンの足元にドロはいた。沼地の泥に紛れて、小柄な体で動き回っている。ガメゴンは先ほどからドロを狙って足を踏み下ろしていたのだ。

ガメゴンがドロを踏み散らそうと足踏みを繰り返し、それを上回る速度でガメゴンの動きを攪乱している。ガメゴンが足を踏みあげる前に、また別の足元へ、また別の足元へと。

「危ないっ！！」

間一髪で避けることを続けるドロに、思わず紡宜は叫んだ。その瞬間、ガメゴンの眼が僅かに紡宜を睨んだが、直ぐドロに足を掴まれたガメゴンはまた煩わしそうな目を足元へと戻した。

気が付くと、ガメゴンはだんだんと紡宜から遠ざかっていた。ドロが眼前に立って動き回ることにより、それを追いかけるガメゴンの進行方向を誘導していたのだ。

（これは……私を逃がすため……？）

先ほどから、ドロは紡宜を守るために行動を選択していた。わざとガメゴンの怒りを増長し、自分にその矛先が向かうよう立ち回る。実は、ガメゴンが突進してきた時も、紡宜が居る方や魔物たちが逃げた方へと行かぬよう、突進してくるガメゴンに立ち向かっていたのだ。

ゲームの主人公のように格好よく隣に立って戦うつもりが、思いっきり足を引っ張っている。紡宜はそのことに気付き、しばし呆然とした。

（何かできると思ってた。でも……）

指揮しようにも、本物のガメゴンのことなど何も知らない。ゲーム画面に表示される「こうげき」がこんな突進であることなど、全く知らなかったのだ。知ったつもりで、何も知らぬ間に戦いの地に立ってしまっていた。

紡宜はまだ知らぬことだったが、実際のところモンスターマスターは魔物を指揮して戦うけれど、魔物の隣に立っては戦わない。戦闘範囲ギリギリの場所に立ち、状況を冷静に把握しなければならないからだ。戦闘能力を持たない人間が隣に居ては、魔物も邪魔に思うだけである。

（何も、知らない――）

目の前のマドハンドが何ができるのか、それさえ知らない。それを知らなければ、指揮などできない。このままだと、何もできない。

紡宜はぐっと唇を噛みしめた。その光景を、目の前で行われているその戦闘を、一つも逃さぬように目に焼き付けていく。ドロが踏み

つけられそうになるたび声が漏れそうになったが、それもじっと我慢して戦いを見続けた。

邪魔者はまっぴらごめんだった。せっかく格好よく勝負を挑んだのに、このままではとても格好悪い。それもまた紡宜には堪えられなかった。

（だったら、知りたい！）

心の中で呟いた一言。他の何でもなくたった一つ願ったその呟きが、紡宜の“眼”に変化を起こした。

ガメゴン　♂
Ｌｖ：７
攻撃力：２８
守備力：４９
素早さ：１１
賢さ：２６
野生：１７６
ＨＰ：９４／１００
ＭＰ：９／９

「――ッ！？」

不意に、紡宜の視界に見慣れない文字列が浮かんできた。それと同時に、脳裏を電流が駆け巡るような、不可思議な感覚に襲われる。

視界に映るものから、一気に情報が頭に流れ込んでくる。そして、頭に流れ込んできた情報が、そのまま視界に投影されていく。紡宜の視線の追う先、そこに映りこむ情報は紡宜が知りたい望んだものの一つ。

経験による直感が最善の選択を取ったのは、恐らくそれを理解するよりも前だっただろう。

「ドロちゃん、『攻撃』して！！」

紡宜の叫びに、ガメゴンは今度こそ顔を持ち上げた。鬱陶しそうな顔で紡宜を睨み、威嚇せんと口を広げる。紡宜はその所作を眺めながら、柔らかに笑んだ。

「勝てるよ、ドロちゃんなら」

ドロ　♂
Ｌｖ：１
攻撃力：５１
守備力：７９
素早さ：４１
賢さ：６６
野生：１０８
ＨＰ：４４／４５
ＭＰ：３３／３３

――――ドグンッ

重たい砂袋を思い切り蹴っ飛ばしたような音が鳴り響く。

ガメゴンの体が下から持ち上げられたように、ふわりと僅かに浮き、そして地面に叩き付けられた。足元に溜まった泥が盛大に飛び散り、顔や泥にべっとりと付着した。

「グゥ……ルル……？」

一体何が起こったのか、理解できていない様子でガメゴンは呻き声を上げた。立ち上がろうと手足をもがくが、予想外の攻撃を受けたダメージにより、上手く力が入っていない。普段は露わになることすらない腹部を思い切り叩かれたことで、『会心の一撃』を受けてしまった結果だ。

異様なほどに腹が痛む。足がふらついて立ち上がることが出来ない。まさか、自分は攻撃を受けたのか。そうガメゴンが徐々に理解し始めてきたとき、這いつくばった目の前の地面から手の形を成した泥の塊が生えた。

先ほどまで自分の足元でちょろちょろと動き回っていた、うざったらしい魔物。見知らぬ人間と共に現われ、そして自分の邪魔をする魔物。

そうか、コイツが――

「グルァァァァァァァァァァァ！！！！！」

ガメゴンの眼が、鋭く見開かれた。本気の殺気を帯び、先ほど負った怪我など物ともせず猛り狂う。

首と尻尾を縦横に振り回し、その反動を活かし甲羅ごと回転をする。足元にいる敵など関係なく、周囲にあるものを纏めて薙ぎ払おうという攻撃だ。その回転は凄まじく、風を切る音が耳を打つほどである。

元々、逃げる敵を追って踏みつけるなどという攻撃は鈍重な体には合っていない。来る敵を待ち受けてその堅牢な甲羅にこもり、そして近接してきた敵を纏めて叩き潰す。それがガメゴンの本来の戦い方であった。

沼を伝って移動するドロは繰り出された攻撃を流れるように避け、その攻撃範囲から離れたところで攻撃が静まるのを待った。

「ドロちゃん」

ドロの背後には、静かに近づいていた紡宜が立っていた。ドロは声をかけられて初めてその存在に気付き、直ぐさまその傍から離れようとした。今の猛り狂っているガメゴンに紡宜を近づけることは、とてつもなく危険な行為だ。

しかし紡宜は、自分から一歩下がってドロから離れた。

「ごめんね、ありがとう。ドロちゃんだって怖いのに、私を逃がすために立ち向かってくれて」

紡宜の硬い声に、ドロはガメゴンの方を向いたまま、ピクリとも動かなくなった。意思の伝わらないその後ろ姿は、話を聞いているの

かどうかすら確かめられない。しかし紡宜は、ドロの意識が確かに自分に向いていることを感じていた。

「あと、４発。それだけ攻撃が当たれば確実に勝てるよ。相手の攻撃は思ったよりも痛くないだろうから、ガンガン行っても大丈夫！」

そして、得た知識を用いてドロに助言と指示を与える。胸の前で両手拳を握りこんで小さなガッツポーズを作った紡宜は、自信満々に言った。

「頑張ってね。終わったら、皆で一緒に大樹に帰ろう？」

戦いの場とは思えないほど静かで穏やかな時間がドロと紡宜の間に流れる。

クルリと紡宜に振り返ったドロは、気合が入っているのが見て取れるほど力強く拳を握りこんだ。そしてパッと開くと回転の緩くなってきたガメゴンへと近づいていく。

満足げに笑んだ紡宜は今度こそ、戦いの邪魔にならないところまで身を引いた。そこで、何をするでもなく戦いの成り行きを見守る。そこは、『モンスターマスター』の立ち位置だった。

「ボクが守るんだ」

「え？」

突如聞こえた少年のような高く抜けていく声。紡宜はキョロキョロと辺りを見回しその声の主を探したが、そこには当然誰も居ることはなく、空耳かと考えた紡宜はその目を戦いの場へと戻した。

ほどなくして、回転を止めたガメゴンがドロに牙を向く。ドロはそれを華麗に躱しながら、自分の得意な地形を生かして背後へ、足元へと潜り込み、攻撃を仕掛ける。

1発目、2発目、3発目――

「いっけーッ！！」

紡宜の掛け声と共に放たれたドロの拳は、最早虫の息となったガメゴンの横っ腹に突き刺さる。最後に小さく掠れた呻き声を残したガメゴンは、その場に倒れ伏した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7880u/

ツムギの唄

2011年12月16日02時46分発行